

『地球生活記 世界ぐるりと家めぐり』

小松義夫著／福音館書店

『此処彼処』

川上弘美著／日本経済新聞社

『辺境・近境』

村上春樹著／新潮社

『街道をゆく』

司馬遼太郎著／朝日新聞社

人はなぜ旅に出たくなるのでしょうか。

人を旅へかりたてるものは何でしょう。特定の場所へのあこがれ、日常とは違う何か、そんなものを求めているのでしょうか。

自分自身が旅をすること、旅についての著作を読むことはまったく別の行為であるにもかかわらず、読み終わると、もしくは読んでいる最中にもまるで自分も一緒にその土地をめぐったような気持ちになる本があります。そんな本に出合えたときは本当にうれしい。あくまでも個人的な体感なので、おもしろくないよ、と言われてしまうかもしれないけれど、以下に紹介するのは私の旅心をかきたて旅の充足感を与えてくれた本です。

『地球生活記 世界ぐるりと家めぐり』 小松義夫 福音館書店

アフリカ、ヨーロッパ、アジア、オセアニア、アメリカと、五大陸の家屋とそこに暮らす人々の写真集です。想像を絶する家ばかりで、建築に興味のある人にもない人にも一見の価値があります。石、土、木、竹、草など素材はその土地特有のもの、建っている場所も砂漠、川や海の上、地下など様々。

ページを繰るごとに、こんな家が本当にあるのか、こんなところによくぞ住んで、という驚きの連続です。それら世界各地の写真を見た後では、見慣れているはずの日本の首都圏の過密ぶりの写真も、これだけ沢山の人がほんとに住んでいるのか、というなんだか非現実的なものに見えてくるから不思議です。

『此処彼処』 川上弘美 日本経済新聞社

バックパックやスーツケースを持って遠いところに行くだけが旅行ではない、この本を読むとそう思います。家のすぐ近くの玉川上水沿いの雑木林でも、仕事

の途中で通りかかった地下鉄大手町駅の雑踏でも、インドリを見に行ったマダガスカルでも、遠くても近くてもその場所で感じた気持ちのゆらぎが同等のものとして描かれているからです。

川上弘美さんの文章を読んでいると、平易で客観的な言い回しの中に、ときおり日常を飛び越えた何か違うものがひょいと顔をのぞかせる瞬間があります。この本はじつは旅について書かれたものというよりは、場所についてのエッセイなのですが、文章の独特な力によって、普段の生活の中に潜む「旅」が軽やかに浮かび上がってくるのを感じます。

『辺境・近境』 村上春樹 新潮社

村上春樹氏の紀行エッセイの中でも、「旅をする」ということに強く意識を向けて書かれている作品のように思えます。瀬戸内海の無人島の一泊、3日間食べ続けた讃岐うどん、震災のあとの故郷神戸を歩く旅、メキシコの歌謡曲あふれるバス、車でのアメリカ横断、そしてノモンハンの戦車や草原の狼。読んでいると、自分自身は透明になって、旅をしている作者の上空から、または作者のすぐ隣で、それぞれの土地を見ているようです。

また本書に挿入されている写真は文章とのバランスが抜群です。それらの写真は本篇とは別に「写真篇」として1冊にまとめられており、文章とはまた違う旅の一面を味わうことができました。

『街道をゆく』 司馬遼太郎 朝日新聞社

昭和46年から週刊朝日に25年間連載されたもので、単行本では全43巻になる大著です。司馬遼太郎氏は国内各地だけでなく、オランダ、アイルランド、台湾、ニューヨークなどの海外も訪れ、日本人及び日本についての思索を縦横無尽にめぐらせています。

今回、ブックガイドの原稿を書くにあたって上記の『辺境・近境』を読み返していたら、ノモンハンのくだりで、『街道をゆく』第5巻の『モンゴル紀行』を思い出しました。こちらにもノモンハンのことが記されており、久しぶりに再読し

ました。

平成6年の村上氏はノモンハンに行くことができましたが、昭和48年の司馬氏にはモンゴルと中国の国境など、行きたくとも行けない場所だったのではないかと思います。実際に戦車の残骸や落ちていた銃弾などに触れた村上氏のノモンハンと、ウランバートルやゴビ砂漠から歴史的一幕として描いている司馬氏のノモンハンを興味深く読み比べることができました。

『モンゴル紀行』は少年時代から抱いていたモンゴルへの透明な憧れと、学徒出陣でご自身も戦車兵科の下級将校として戦争に関わらざるを得なかった作者の満州への陰鬱な思いが、豊富な歴史知識と深い思索により純度の高い結晶のような文章で構築されている旅行記です。『街道をゆく』はどの巻もたいへん読み応えのある作品ばかりです。関心のある地名があれば、是非一度手にとってみてはいかがでしょうか。

大学生の頃は時間がたっぷりあったのだと気付いたのは社会人になってから、ことに痛感したのは結婚して子どもが生まれてからです。知らない土地に行ってみることや歩き回るとは時間と体力のあるときにしかできません。なので、まずは実際に旅に出ることをお勧めします。けれども他の人の視点をとおして見知らぬ土地を（または自分の見知った土地であっても）眺めることのできる旅行記を読むことも得がたい経験になるのではないのでしょうか。

この稿を読んでくださったあなたも、どうぞよい旅を！

執筆者紹介

安原 明子

本学学術情報課学術資料係長。担当事務は図書館資料の受入、管理、分類等。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『地球生活記：世界ぐると家めぐり』小松義夫著 福音館書店 1999年 5,250円

-
- 『此処彼処』川上弘美著 新潮社（新潮文庫） 2009年 460円
『辺境・近境』村上春樹著 新潮社（新潮文庫） 2006年 500円
『街道をゆく 全43巻』司馬遼太郎著 朝日新聞社（朝日文庫）新装版 2008-2009年 525-987円
『辺境・近境 写真篇』村上春樹著 新潮社（新潮文庫） 2006年 780円

[ブックガイド目次へ](#)